

航 空

野砲隊員から航空無線

満州・南支での労苦体験

香川県 瀧 崎 周 一

私の家族は父、姉二人、弟二人、妹一人の七人家族で、母は私が十六歳のときに亡くなりました。私は三男ですが兄二人は幼くして亡くなりましたので跡取りとなり、家業の農業を父と共にやり、米とタバコを栽培していました。

当時、若者は青年学校に通い、兵隊に行くまで軍事教育を受け、体を鍛えるためにスポーツに励んだものでした。私は生来声が大きいので、入隊してからも朝

の体操の号令は三六五日のうち三六〇日、ずっと私が掛けました。私も当時の東京市のマラソン大会で一位になりました。剣道は二段を取り、バレーボールもやりました。

昭和十六（一九四一）年三月、徴兵検査で甲種合格となり、徴兵官から海軍へ行けと言われましたが、私は「海軍は好かん」と断りましたら「それなら砲兵だ」と怒りもせず、私の言い分を認めてくれましたが、あの軍国時代によくも私のわがままを通してくれたものだと後々思いました。

昭和十七年一月十日、広島第六連隊野砲兵隊に入隊、三月二十日、一期の検閲（満州行きのため間に合わせの検閲）を終え、三月二十七日宇品出港、釜山から北上し満州国に入り、牡丹江から虎頭に到着、第四

国境守備隊（第八七五部隊）第七中隊（隊長・齊藤中尉）に初年兵四十三人が配属され、四月七日入隊式を終え、一期の検閲に向けて訓練を始めました。

ウスリー河に沿った山の横腹をくり抜いて堅固な要塞があり、入り口から階段を降りると大きな水がめがけがありました。そこを左に曲がると病院になっており、その先は一般の兵舎があつて、二カ月ぐらひは持ちこたえられる食糧、弾薬の貯蔵がありました。非常の時は野砲も要塞の中に砲塔があり、引き込む仕掛もありました。

周辺には現地人の部落も無く、全くの無人地帯に造った要塞地区ですね。中隊には二〇頭の馬がいて、初年兵は手入れ、馬運動等が主な任務でした。

兵器は班に小銃が五丁あるだけで、帯剣が武器でしたが短剣術の教育はありませんでした。

一期検閲のやり直しが始まり、砲手、観測、通信の三つに分かれて教育を受けます。教育は少尉、助教、軍曹、伍長と三年兵の上等兵一人です。私は砲手の教育を受けました。七月の検閲の時、三発の実弾射撃の

時、その三発全弾命中させましたので評判になり、そのお陰で一選抜の上等兵になれたのだと思います。弾丸は長さ四五センチ、太さ一〇センチでした。

内務班は初年兵、二年兵、三年兵の混合で、召集兵も若干いました。二年兵は大阪出身者、三年兵は愛媛も出身者が多かったので、どの隊でも初年兵のうちは何かにつけて叱られることばかりで、毎晩ビンタの無い日は正月と二月十一日の紀元節だけだったと思います。靴の手入れが悪いとか掃除の仕方が悪いとか、整列ビンタは年中行事の一つでした。いま振り返ってみますと、あの苦しい初年兵の体験は六〇年経った今でも懐かしく思われる貴重な体験だったと思います。

現在の青年にあの体験の三分の一でも良いから体験させることが大切だと思います。とくに齊藤中隊長の訓示は「人間はまっすぐな道を歩め」「他人には絶対迷惑を掛けるな」の二つを教育方針として、兵隊に常々教えられたせいかな、理不尽な私的制裁はなかったと思います。

戦後、宮城県におられた中隊長を訪ねましたがお元気でした。二回目に訪れた時は病氣、三回目には亡くなられた後でした。とても良い隊長でした。

野砲隊の演習は、馬の代わりに兵隊が砲を引くことがあります。馬六頭で引く砲車を兵隊が代わっても、そう簡単には引けません。少しぬかるみに入れば全く駄目です。山砲は分解できますが野砲は分解できませんから、車輪にしがみついて少しでも前に進める。悪戦苦闘の結果何とか陣地に辿り着く始末でした。

ようやく二月末、一期の検閲が無事終了しましたが、その後も毎日野外演習、陣地内演習の連続でした。

昭和十七年四月、一選抜の上等兵五人のトップに入ることができました。次いで昭和十八年七月、兵長一人だけの一人に選ばれ、九月には下士官勤務兵長となり、十一月には中隊でも僅か一人だけの班付兵長になり、昭和十九年一月には伍長に任官しました。同期兵では一等兵がほとんどでした。

そのころには軍人勅諭を原文(変体かな)のままやらんじて筆記できました。たしか中隊で三人しかいませんでした。また硬筆は入隊してから一年間九時から十二時半まで中隊事務室で夜間勉強をしました。不寝番も私の勉強を見逃してくれましたので、筆記の文字も上手に書けるようになりました。これも体が丈夫だったから、これだけやれたと思います。

昭和十九年八月、奉天(瀋陽)の航空無線学校に派遣され、一カ月間、無線の送受信の教育を受けました。一分間一二〇字の送受信ができるようになりました。

十一月になると牡丹江で編成された第五十九航空地区司令部に、一人だけ転属を命ぜられ、中佐を司令官とする五十人の小部隊でした。飛行隊三つの指揮を取る役目ですが、飛行機がなくてやる事が無く、毎日暇を持て余していました。兵隊は二十七人で、寄せ集めの部隊でした。

昭和二十年一月、中国に移動、一月二十日、南京に

到着しました。南京の飛行場には僅か三機の飛行機（集）しかありませんでした。

その後、武昌から岳州へ、そして五月末に衡陽へ到着、陣地構築。その後、桂林まで行く予定だったのですが、支那派遣軍の「十一号作戦」が終結し、全軍北上中のため南進の予定が立たず、衡陽で立往生しているうちに八月十五日の終戦を迎える羽目になったのです。空襲は一回も受けておりません。

八月十六日午後に無線で終戦を知りました。翌十七日早々と蒋介石軍が来て武装解除を受けました。

それからは引揚げの準備に入り、宿舎は市内の寺院らしき建物に入りました。中国軍から支給されるのは玄米だけで野菜はありません。部隊独自の炊事で、チヨビ券が下落して思うように副食品の調達ができません。敗戦前までは徴発でまかかったのが、敗戦後は徴発ができず、野菜の調達には苦労しました。終戦後は入浴できず川水で体を拭きました。

いよいよ引揚げが決まり、武昌に向け徒歩行軍を開

始しました。衡陽を十月出発、武昌に着いたら陸軍病院の看護婦が男装しているのに驚きました。敗戦の哀れを痛感しました。途中は、行軍の連続のため野宿も珍しくありませんでした。外出でマントウを食べて帰ったのですが、私は野宿で腹を冷やしたのが原因か分かりませんが、激しい下痢に襲われ、六八キロあった体重が、なんと四三キロになってしまったのです。自分で歩けなくなりました。

軍医さんから「こんな体では日本に帰れん、絶対無理だ。ここに残れ」と言われましたが、私は何としても家に帰るんだと決心し、町の薬屋で「わかもと」の大瓶を千二百円（今の金で幾らになるでしょうか）で買い、一生懸命飲みましたので治りました。それから四カ月間、歩きに歩いて、翌昭和二十一年四月十五日にようやく上海に到着しました。終戦後も難行軍の連続で苦労が多く、四人の死者を出しました。

小さい日本の貨物船に乗って鹿児島に向け出港しましたが、途中海が荒れて五月六日に鹿児島に到着、五

日間船上待機となり、五月十一日に上陸しました。そして宇高連絡船に乗り高松に五月十八日に帰りました。四年四カ月ぶりの帰宅でした。

広島島の惨状に息を飲み、機関車の上に乗る者もいました。家族は全員無事で、突然の私の帰国を喜んでくれました。

終戦後、いろいろ苦労がありました。軍隊当時の苦労に較べれば、命に関わる問題は全くありませんでした。復員後、民生委員以外の公職はやりませんでした。推されて町会議員を三期勤め、一時は十六の役員をやったこともありました。生来の健康に恵まれ、現在でもスポーツ振興会の役員、水利組合、体育実行委員会、カラオケ会の会長（十六年目、会員二〇〇人）、五十歳バレーボール会長、結婚相談委員等の役職をこなしています。出て行くことが健康管理に良いと思いません。現在、家ではタバコ、米、それに果樹をやっています。父は八十六歳まで働き八十九歳でなくなりました。

満州当時の者が集まって戦友会をやっていますが、

会員は五分の一ぐらいに減ってきました。ライオンズクラブにも入りましたが、県外出張と寄付が多くて途中で止めました。

回想

愛媛県 根本 秀徳

私の出生地は、関東の佐倉です。家族は両親と、私が長男で弟三人、妹二人の六人兄弟と、祖父母を加えた十人家族で、全員健康で幸福な家で笑い声の絶えない家でした。家業は田地九反歩余・畑地約一町歩の合計二町歩で（機動力は無くすべて人力）、家族全員が力を合わせて農耕を行い、朝に霜を踏み、夕べに星を頂くように励みました。お陰を持って生活は楽な方でした。

私は特に読書が好きで、世に言う「晴耕雨読型」でした。祖父が「秀徳は家督を相続せず、何か別の世界に進む男だ」と申しておりました。そして笑いながら